

これが私の生きる道？

結城 真由美

母子保健研修センター助産婦学校教員

先生ってだれ？私のこと？

先生と呼ばれてはや数か月が過ぎました。今までは、「結城さん」「結城先輩」「助産婦さん」などと呼ばれていた私でした。最初は、先生と呼ばれてもピンとこなくて「だれ？私のこと」という感じでした。看護学校の同級生からは「だれか1人ぐらいはいるとは思っていたけれど、まさかあなたとはねー」「あなたが先生なんて、競馬でいえば第4コーナーを回って一気に抜いて行ったって感じ」と言われました(そんな彼女だって今は、病棟では主任と呼ばれています)。学生時代には決して「まじめな」「優秀な」など似合わない学生でしたので、致し方ありません。

行雲流水

私は、臨床で働いていたときに褥婦さんや婦人科の患者さんから、「なぜ助産婦になろうと思ったの？」とよく聞かれたものです。私自身ここでカッコいい返事ができるとよかったのですが、恥ずかしながら思い浮かばないのです。

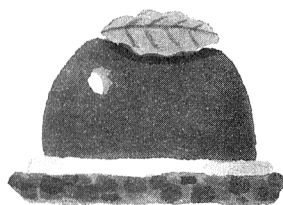
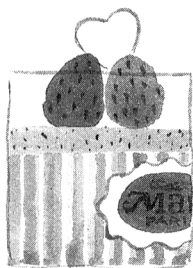
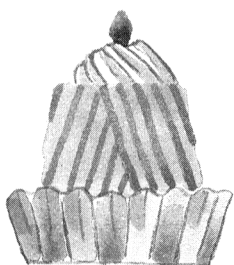
看護学校のときは、「どうして看護婦になりたいと思ったか」と、授業の時間などに聞かれました。クラスメイトは「人の役に立ちたいと思った」などと言っていたのは覚えているのですが、さて、私は何と答えていたのか？ これもまた情けないことに思い出せないのです。

でもなぜ、私は助産婦になったのでしょうか。まず事のはじまりはあまり深く考えないまま、看護学校を受験したことです。

私の中学のときの同級生が「看護婦になりたい」と言っているのをよく耳にしました。その友人の言葉がインプットされてしまったのでしょうか、なんとなく心の片隅に、「看護婦になろうかなー」という気持ちが湧いてきました。そう、ただ漠然と……。そして高校3年の進路を決めなくてはならないとき、何がしたいのか全く決まっていなかった私に、高校1年時の担任の先生が「結城さんは1年生のときに看護婦になりたいと言っていたけど、私はそれがいいと思っていましたよ」とおっしゃいました。私自身そのようなことを先生に話をしていたなんて、覚えてもいませんでしたが……。こうして私は看護婦とはどういうものなのか、どんな仕事をするのかなど何も考えずに、看護学校の受験を決めてしまいました。

看護学校に入学し、授業・演習・実習と月日が過ぎていく中で、「看護婦は、注射をするんだっけ、浣腸もするんだ」とあとから看護婦の仕事内容を考えて後悔もしたものです。そして、実習をしていくなかで、夏休み中に産婦人科病棟でアルバイトをしたこともあり、この病院で自分が働くのなら、産婦人科がいいと思うようになりました。アルバイト経験により私は、実習に行っても物品のある場所は知っていたし、自分自身も実習がやりやすかったこともあったからでしょう。

そして次に、「産婦人科で働くのなら、看護婦より助産婦のほうがいだろうなー」と考えるようになりました。しかし、私は成績が良かった訳では決してなく、その上、生来の怠け者ときているので受験となると大変です。1年間働いてから



勉強をして受験をしようかとも考えましたが、受験勉強から離れたが最後、決して受験をしようと思うことはないであろうと私の性格を見抜いていた先生に「現役にまさるものはない。受けるだけ受けてみなさい」と言われ、助産婦学校を受験することにしました。受験をしてみると、驚いたことに私は、助産婦学校に合格したのです！

かくして私はまた、助産婦学校で授業・実習と日々過ごすなかで、助産婦は自分で判断し、その判断が母子の一生を左右するかもしれないと知り、自分の考えのあさはかさを痛感し、責任の重さを感じるようになりました。

そして今は、これもまた偶然に偶然が重なって、教員という仕事に就いています。この私が、助産婦の育成に励んでいるのです。

こうして考えてみると、行雲流水、私はただ自然のなりゆきにまかせて流れてきました。でも、学生時代も臨床で働いていたときも、決していい加減な気持ちなんかではなく、一生懸命に無我夢中でがんばってきたつもりです。そんななかで、私自身、助産婦という仕事が好きになっていったのです。私は、看護婦と助産婦の国家試験を受け、資格と一緒に、大きな責任も受け取るようになったのです。

教員となった私は、9月の終わりから7人の学生と病院実習に行き、自分の学生時代はどうだったかなーと思いだしながらかたがた過ごしました。なかなか思わせるものではありませんが、なんとなく分かったことがあります。私が学生時代の看護学校・助産婦学校の先生の気持ちです。言葉でうま

く表現することはできませんが、「親の気持ちなんて、自分が親になってみないとわからない」とよく言いますが、先生の気持ちもまさしくそのとおりなのだと思います。授業のこと、実習のこと、記録のこと、国家試験の時のこと、今考えると私は、先生にかなりのご心配をおかけしたのだらうと思います。

最後に

この4月から助産婦として働く卒業生は、やっと卒業という思いがあることでしょう。この1年間は、自分自身が考えていた以上に大変な1年間だったことでしょう。きっと1度くらいは、口に出さなくても「もうイヤ、学校を辞めたい」と思ったこともあったでしょう。これから働くなかでまた、日々悩み苦しみ、自問自答していくことでしょう。そんな時は、自分を応援してくれる友人がたくさんいることを、この仕事を選んだことを喜んでくれている人のことを、そしてなによりも、今まで実習で接してきた妊産褥婦さんたちのことを思い出してがんばってもらいたいと思います。星の数ほどある職業のなかから、この助産婦という仕事を選んだことに自信と誇りを持ち、がんばってほしいと思います。きっと、マラソンの有森選手が言ったように、“自分で自分を褒めることができる時がくる”ことでしょう。

さて、今回は、私の助産婦学校の時の同級生、村山輝子さんを紹介します。村山さんは、JR総合東京病院で婦長として忙しい毎日を送られています。